

木乃さい

「葵の上」

(三〇〇字)

私が推すのは、左大臣家の姫君「葵の上」である。彼女は源氏の元服以来の正妻であるが、互に長年打ち解けられずよそよそしく接していた。源氏より四歳上であること、深窓の姫君ゆえの気位の高さなどから、彼女はなかなか素直にならない。二人の仲がようやく好転するのは彼女の懷妊後。心細さを見せる葵の上に対して源氏は珍しくも葵の上に愛しさを感じるようになる。それに対する彼女の愛情の示し方は「いつもより少しだけ長い間見送る」ことだった。非常に慎ましいが、恐らくこれが気位の高い彼女なりの精一杯だったのだろう。そして出産を経て、さあ今からという時に葵の上は急逝する。彼女の儚い愛情表現はいつまでも私の心に残っている。